

# 救急車により搬送された重症患者の医学的検証結果 資料1

【目的】第2回検討会において提示された「重症患者の救急搬送状況調査」結果から、ヘリコプターによる搬送又は医師の現場出動が有効であったと思われる症例の推計を行うため、医学的見地からの検証を行うことを目的とするもの。

## 【対象・方法等】

対象：救急車により日中(8時～17時)に高知赤十字病院、高知医療センター、近森病院へ搬送された救急患者のうち、三次救急患者(実際にICUへ入院し、生命の危険がある重篤な患者)であり、かつ現場から到着までに30分以上を要した症例を抽出。

方法：各症例の傷病名、転帰等を参照し、検証。

日時：平成21年10月13日 18:30～20:30

検証者：西山委員、根岸委員、杉本委員、澤田委員

## 【結果】

- ・対象3病院へ現場から30分以上を要して搬送された三次救急対応患者数は181人であった(右表参照)。
- ・搬送時間を問わず、転帰が死亡である患者数は3病院の計で158人(外来死亡33人+入院後死亡125人)であった。

## 【考察】

- ・上記症例181例のうち、高知医療センター分について杉本委員により当該症例のカルテ等を参照して詳細に分析した結果、厳密な意味でのヘリ適応から外れるものは約1割であった。
- ・また、厳密なヘリ適応という観点からは、搬送時間に関わらず、転帰が死亡であるものとも考えられるのではないかと、という意見もあったが、今回検証した症例は全て三次救急患者であり、実際にヘリ搬送された重症患者の多くは生存退院していること、今回推計された対象範囲はヘリ要請基準と大きく関連すること等を考慮すると、死亡患者に限定して推計するのは適切ではないとの考えに至った。
- ・さらに、総務省消防庁や多くのドクターヘリ運航主体におけるヘリ要請基準や論文(\*1)では、重篤な病態にあることと併せて「救急車等で概ね30分以上を要するもの」と規定しており、本検討会でも30分以上

※参考文献(\*1)Flanigan et al, Air Med J. 2005 Jul-Aug;24(4):151-63.

の搬送時間を要する重篤症例(三次救急患者)をヘリ有効患者として推計することが妥当であるとの判断がなされた。

- ・以上のことから、高知医療センター以外の2病院へ搬送された個々の症例について、これ以上のカルテ等による詳細な医学的分析を追加的に行う必要はないとの結論に至った。

## 【結論】

- ・日中(8時～17時)に3病院へ救急車搬送された三次救急患者のうち、ヘリ搬送(医師の現場出動)が有効であったと推定される症例は、現場から病院まで30分以上の搬送を要した362例(12ヶ月換算)であった。
- ・また、今回抽出された搬送症例については、更なる医学的分析を追加する必要はないと結論づけられた。

表：救急現場から病院到着まで30分以上を要した三次救急患者数

	高知赤十字病院	高知医療センター	近森病院	計①	年間推計(計①×2)
1高知市消防局	1	0	1	2	4
2室戸市消防本部	0	3	5	8	16
3安芸市消防本部	4	28	9	41	82
4香南市消防本部	3	2	2	7	14
5香美市消防本部	0	2	6	8	16
6南国市消防本部	1	0	0	1	2
7土佐市消防本部	2	2	0	4	8
8中芸広域連合消防本部	0	10	6	16	32
9高吾北広域町村事務組合消防本部	12	4	21	37	74
10仁淀消防組合消防本部	2	1	2	5	10
11嶺北広域行政事務組合消防本部	2	11	5	18	36
12高幡消防組合消防本部	9	10	15	34	68
合計	36	73	72	181	362